CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 22

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）

報告____ 農業ボランティアの手引き/コンポストの新たな展開 p1
連載____ 愛着を育む対話 ～ボランティアリーダーについて思うこと p5
事故事例コラム（５） p6
総会のご報告 p7

報告　農業ボランティアの手引き　/　コンポストの新たな展開

■はじめに

朝廣和夫　（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN理事長）

皆様、コロナ禍をいかがお過ごしでしょうか。通勤、通学、日々の買い物、そして、様々な地域活動、ボランティア活動を含め中止・延期がなされたと思われます。また、7月の豪雨。九州は熊本をはじめ、多くの被害をもたらしました。身近な方で体調など崩された、被災された方がおられましたらお見舞い申し上げます。

さて、コロナ禍は、今まで考えても見なかった経験、思索の時間をもたらしたように思います。例えば、家族との時間が増えた。テレワークが当たり前になった。公園や自然の中などをゆっくり楽しむ機会が増えた。よく本を読む、もしくは、テレビやネットのコンテンツをよく見るようになったなど。

コロナ禍の前には、「都市の時代」、「観光の世紀」など、グローバル時代を彷彿とさせる世界が当たり前でした。しかし、今はどうでしょうか。度重なる豪雨災禍を含め、都市の住まい方、観光の楽しみ方が問われているような気がします。

地方の実家や田舎に居を構えながら、テレワークで仕事を行う。空いた時間は家族との生活、趣味を楽しみ、もしくは、庭仕事、畑仕事、山仕事に汗しても良いかも知れません。

人の生活が分散すれば、観光は都市ではなく、より地方へ、田舎への分散が進むかもしれません。暮らしの豊かさが変わる。世界同時に。そういう時代の到来が予感されます。

なお、豪雨災禍を考えれば、都市・田舎関係なく、安全な住宅供給が課題のように感じます。

*　　*　　*　　*

さて、本紙面では、特集ではありませんが、2020年3月に公開した「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」について、約2頁を割いて紹介します。加えて、コンポスト活動の新たな展開、アーティストがみる環境保全活動、事故事例コラム、そして総会報告です。

一つ一つのトピックは、あちこちを向いているようですが、いずれも、『今』性のある話題です。

■『災害後の農地復旧のための共助支援の手引き』の紹介

朝廣和夫　（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN理事長）

1.「手引き」の位置づけ

前回の会誌21号では、2019年度に実施した「農業ボランティアコーディネーター育成」について紹介しました。その教材として制作・公開したのが、この手引き、「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」です。

これは、災害時に、農業ボランティアセンターの設置・運営を行うコーディネーターを対象とした冊子です。現在、災害時は社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを設置しますが、「生活支援」を目的としているため、営利を目的とした農業への支援、すなわち「生業支援」は行われてきませんでした。しかしながら、福岡県では、過疎高齢化の進む農村、多面的な役割を持つ農業、そして、それを支える農家の健康・生活の早い復旧を実現するために、地域住民、NPOのみならず、JAと行政機関が連携し農業ボランティアセンターを設置する活動を開始しました。本手引きは、そのマニュアルです。災害は、毎年、全国で生じており、この福岡県の事例を、全国の活動に活かしてもらいたいと考えています。

2.「手引き」が生まれた背景

近年、激甚化する災害において、過疎化・高齢化する農山村の保全・復興は、大きな社会問題となっています。被災した農家は、自家復旧、もしくは行政の災害復旧制度を選択するのが主流です。しかしながら、体力的に、経済的にあきらめたり、事業開始まで数年かかり、復興が遅延する状況にあります。健康を害したり、離農、離村せざるを得ない事例もあるのです。農業被害にボランティアを繋ぐ「仕組み」がないため、家族や、地域住民、NPOによる草の根の活動が、現在は頼りです。九州北部では、2012年の九州北部豪雨以降、NPOを中心とした農地・農業用施設の復旧、農業支援等の活動が展開し、2017年の豪雨では、JA筑前あさくら、行政機関が連携し、農業ボランティアセンターが設置されました。

3.「手引き」のデザイン

限られた地域の力と制度の隙間を埋めるため、被災した農業・農村の復興には、創造的な活動の場と、新しいコミュニティーの形成が求められます。私は、その１つの方法が、市民ボランティアの手を被災された農家・農村に繋ぐことと考え、本手引きをツールとしてデザインしました。

一般的に農家は、ボランティアに支援を仰ぐ考えを持たれていません。本冊子は、まず、関係者に冊子を手に取ってもらい、そういう世界があり、「よし、やろう」、そして「できる」と認識してもらうことを意図しています。実際の活動が安全に、多くの人々を巻き込み実施できるよう、事例や行政の情報、大学の成果を編集し形にしました。

手引きの制作は、主に下記の３つのポイントを検討しました。

① 多くの人に手に取ってもらうことを意図し、イラスト、写真を挿入し、親しみのある冊子デザインとした。

② 農業と施設復旧の事例に基づくプロセスを紹介することで、従来、困難だった活動ができることを示した。

③ 本編・事例編・様式編の3部構成とし、ユーザーが利用しやすい工夫を凝らし、仕組み化を提案した。

次頁では、その特徴について、少し紹介します。

4. 手に取ってもらえる「手引き」

被災された方々、災害復旧に関わる様々な方々に農業ボランティアへの動機づけを喚起するには、概念を示すイメージ、過去の成功事例、実施する具体性、そして、一緒に連携できる仲間と出会い、対話をすることが重要です。

本紙面では、次のような挿絵を作りました。左のページは農ボラを「行わなかった場合」、右の

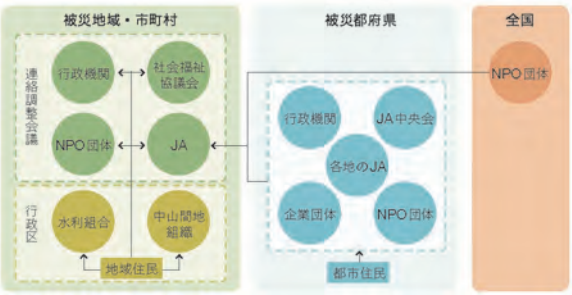
ページは「行った場合」です。ちょっと写真が小さくて見えませんが、模式図として「生産」「生活」「健康」という３つのキーワードを記載し、相互に矢印を示しています。「行わなかった場合」、生産環境復旧の遅延が、生活復旧の遅延、健康の悪化に連環するかもしれない。「行った場合」、生産活動の早い復旧が、生活を早く取り戻し、健康も維持できるというメッセージです。

その他、これまでの農業ボランティア活動の写真を随所に配置し、具体的に活動をイメージできるようにしました。

5. 農ボラ実施のプロセスを紹介

農業ボランティア活動の展開は、実に様々です。手引きの事例編には、九州北部で数々展開された諸活動の運営組織のタイプを記述しています。その知見を合わせると、下記のような図になりました。被災した場合、まず、初動は地域住民や地域組織が復旧の取組を開始します。次にその被災地域の行政機関、社会福祉協議会、ＮＰＯ団体、そしてＪＡが支援活動を展開します。農業ボランティア活動を展開するには、これらの団体に加え、ボランティアや外部支援との繋ぎ手が必要となり、県レベルの行政機関、ＪＡ、企業、各地のＮＰＯ団体が連携に加わります。地域、災害により様々ですが、大枠、このような連携が必要です。

手引きの本編における、目次の大見出しは、次のような構成としました。



- 災害と支援に関する基礎的知識
- 農業ボランティアセンターの設置運営
- ニーズ調査と活動の計画
- ボランティアコーディネート
- センター閉鎖に向けて

農ボラは、一般的な災害ボランティアとは異なる主なポイントが、いくつかあります。

１つ、生業支援であること。時に、ボランティア精神に反すると言われますが、これが前提です。

２つ、行政が行う災害復旧事業との仕分けが必要です。予定地に調整なしに手を付けてしまうと、事業から外される可能性があります。ニーズ調査の段階で、行政機関、農家、支援団体間で作業の分担を明確にする必要があります。

３つ、ボランティアは事前予約制であること。実施する農家・農地は事前調整が必要で、必要とされるボランティアの数も調整を行います。

４つ、手作業だけでなく道具、時にはバックホーなどの重機を用います。農地の他、水路、ハウスなどの農業用施設の復旧には、手で小石やごみを拾うほか、スコップやクワ、一輪車を用いたり、土砂が多い場合は人力ではなく重機を用います。

５つ、農業、農地の構造や構成について、一定の知識を有する人が現場監督（ボランティアリーダー）として入る必要があります。

細かくは、その他、いろいろあるのですが、大きくはこの５つです。社会福祉協議会の災害ボランティアセンターが農地・農業用施設の復旧にボランティアを派遣できない理由も、この５点があると想定しています。本手引きでは、これらの点について、簡易にではありますが、紹介をしています。

6. おわりに・入手方法

本手引き、実は、本編、事例編、様式編に加え、「名簿編」を加えることになっています。関係者間での共有・非公開というもので、まだ作成していません。まずは、福岡県で生じた災害対応において、関係者間の対話を行い、手引きで設定した活動の展開がタスクとなります。

さて、本手引きは、Webで公開しています。ご入用の方は巻末のQRコード等を参考にしてください。本編については、朝廣までお問い合わせいただければ発送します。さらに、放送大学で、農業ボランティアに関する講義の撮影も行いました。こちらも、ご参照ください。

■人材育成の新潮流

平 由以子（JCVN理事／NPO法人循環生活研究所/ローカルフードサイクリング㈱）

わたしたちが住み続けられる持続可能な地域づくりは、どのように始まり、実現、発展していくのか。このことにめどがつくまで、NPO 活動が辞められない、これが活動継続の理由です。

NPO 法人循環生活研究所でのコンポスト活動は 1997 年にはじまりました。きっかけは、私の父の病気でした。自分の娘たちが将来安心して暮らせる食卓を目指して、解決策はダンボールコンポストでした。多くの人が参加して持続可能な栄養循環を作ることができると考えたのです。社会に広める方策が人材育成でした。コンポスト名人の母のノウハウをもとに年間 300 回開催し、内容を改善してきました。2004 年には朝廣理事長に相談し、2005 年に内閣府事業として人材養成・支援講座をはじめました。あれから 15 年、JCVN 共催事業として毎年開催しています。10 名枠/年には様々な方が参加され、地域に根差し、行政とも協力しごみ減量と循環型の農の活動を楽しく推進しています。

受講された方々は、地域でのコンポストサポートだけでなく、人間関係の健全な構築、コーディネートできるトレーナーとして全国に点在しています。様々な苦悩や情報を共有し、緩いネットワークで繋がっています。登録した 200 名強のアドバイザーは、年々若年化しているものの、全体的には高齢化もあり現在約 150 名で運営しています。活動が 20 年を超え、コンポストの普及はアドバイザーの力で格段に拡がったものの、生ごみの処理の選択肢が主に①廃棄物として処理し焼却、②自治体で資源化、そして、③自分で資源化、の 3 つだということに変わりはありません。そのうち①が 90%で、未だに 1800 万トンの生ごみが焼却場で処理されています。生ごみの水分量は約 90%です。どれだけ環境に負担なのかは想像の通りです。この事実に打ちのめされ、持続可能な社会へ向けてもういちどイチから考え始めました。コンポストで食の循環の資源をつなげていくには、パートナーシップによる地域再生の仕組みと並行して、市民が主体的に資源循環づくりに参加する仕組みをコンポスト活用によりつくることが大切だと考えました。そのためには人材育成に加え経済活動も重要であり、2016 年にローカルフードサイクリングというプロジェクトを開始しました。

様々な成果がでたのですが、唐突に事業を開始しても、すぐには税金で賄われてきた地域の生ごみ処理に関わるお金問題が解決できない課題がのしかかってきました。そこで、令和 2 年 1 月に新しいコンポスト事業の会社を起業しました。ローカルフードサイクリング株式会社です。

これまで 6 カ月で、約 5000 人が生ごみを捨てずに LFC コンポストで資源化する活動に参加しました。そのうち 90%が初心者、これまで焼却場に出していた生ごみが資源化しはじめたのです。半年間での参加者 5,302 人、生ごみの削減量 103,296kg。CO_2 削減は 36,363kg、この方々が毎日 5 時間エアコンを止めた分に相当します。3 月からはコロナ禍による巣ごもりの影響で生ごみの排出の増加、意識変化がありました。これまでのコンポスト参加者は、60 代以上の女性が 86%でしたが、30～40 代の女性が主になりました。コンポストのデザインをおしゃれな仕様にし、都会人向けにコンパクト化したことで、若い層の参加が増えたようです。LINE サポートを開始し、個人への支援を強化しています。この取組みによりごみが減り、野菜を育てる人が増え始め、自然との接点も増えてきました。当然のことながら、コンポストで出会う虫や微生物への知識や理解が求められています。デザインの刷新とコロナ禍により、若い世代のコンポストスイッチが入り始めたと実感しています。

これまでの顔が見える活動と、都会で動き出した新しい仕組みを、熟練の経験と継続力で、どう絡めていくかが今後のチャレンジです。

連　載

■愛着を育む対話　～ボランティアリーダーについて思うこと

甲斐 隆児（九州大学大学院芸術工学府研究生・アーティスト）

私は今年４月に入学し、朝廣先生の下で、地元の宮崎県日向市平岩金ヶ浜地域における里地里山の基礎的研究を進めながら、将来、地域や環境を意識した地元フィールドでの活動の展開について探っています。

地元は太平洋、日向灘に面した町で、サーフィンができるほどの波が立ち、潮が強い海があります。先祖代々この地に住み、物心つく頃から田んぼや畑で野良仕事を手伝わされていました。大学で油絵を専攻し、子育ち・子育て支援や芸術文化普及を進める NPO 法人や児童養護施設等で勤務し、今後の活動のヒントを得るために、ここに来ました。

これまでの経験から、環境保全や人材育成等について思うことを述べさせていただきます。

まず、地元との関わりについて話させてください。地元への愛着を自覚するきっかけとなったものです。私は高校時代、不登校をくり返していました。原因や理由はなく、迷いや悩みばかりを抱え、そこから逃げていました。そんな私にとって最後の居場所となったのが、地元の海です。そこでしか解きほぐせない気持ちがありました。最後のセーフティーネットだったのです。自分の気持ちを説明しなくても寄り添ってくれる心地があり、当時助けてくれた家族や先生方と同じくらい、地元の平岩金ヶ浜には頭が上がりません。地元とは通じあう何かがあります。それは“対話”だと思います。地域や環境との対話、味わったことがある方もいるのではないでしょうか。

私の感性は地元から授けられたと思っています。感性が生まれた場所です。美しいもの、そうでないもの、いろんなものを見せてくれました。海鳴り、野焼きのにおい、葉っぱの照りの黄金色、足の指をすりぬける田んぼのどろ、ばあちゃんの赤飯のおにぎり、等々。土地と、暮らしや営み、いろんなものを含めて、それが平岩金ヶ浜であり、私の先導者なのです。

その地元は過疎・高齢化が進み、存続の危機にあります。私には地元への愛着と授けられた

宮崎県日向市平岩金ヶ浜

感性はありますが、地元存続・環境保全の知識やノウハウはなく、地域を保全し継承していく作用が弱まっているのを感じていました。そんな時に出会ったのが九州大学ソーシャルアートラボから出された本『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』です。先生の文章を読み、門をたたきました。

人材育成について、愛着の自覚形成プログラムがあってもいいのではないかと思います。愛着は重要な原動力です。その愛着を育てるもののひとつが“対話”だと思います。人との、地域や環境との対話です。改めて自分の中の愛着を捉えなおすことで生まれるエネルギーがあるはずです。

愛着を抱く仕掛けやデザイン。地域や環境について語らう仲間。こういうことへの意識も、活動するリーダーやスタッフには必要です。以前、参加した宮崎県の木城えほんの郷での１泊２日のワークショップがヒントになると思います。１日目に竹で花器を作り、夕食を食べながら語らい、寝る前に星空を見上げる。２日目は森を散策して花や草木を持ち帰り、自作の花器に生ける。ゆったりした流れの中に、なんとも言えない充足感がありました。あの感覚は忘れられません。知らず知らずのうちに自然や環境との語らいや対話があり、そこでの時間や関わり、対話、プログラム、いろんなものを含めたものが物語のように感じました。アートやデザイン、物語、対話。それらは、愛着形成を組み立てる重要な要素だと思います。

■事故事例コラム（５）

志賀　壮史（JCVN 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡理事）

安全管理意識を高めるために、活動に関連する「事故事例」を収集することをお勧めしています。NPO 法人グリーンシティ福岡で 2020 年 1～6 月に収集した事故事例をご紹介します。

*　*　*　*　*

1/31 グロリオサ食べ死亡か？鹿児島県
（テレ朝 news　2020 年 2 月 10 日 19 時 19 分）
鹿児島県内の 80 代男性が自宅で栽培していた「グロリオサ」の球根をすり下ろして食べ亡くなった。
2/18 米ボーイスカウト連盟が巨額賠償で破産
（朝日新聞デジタル　2020 年 2 月 18 日 18 時 23 分）
青少年への性的虐待で数百件の訴訟を抱えていたボーイスカウトアメリカ連盟（BSA）が、連邦破産法 11 条の適用を申請した。
5/31 国道でボランティア清掃　はねられる
（NHK NEWS WEB　2020 年 5 月 31 日 19 時 46 分）
福島県三春町の国道でボランティアの清掃活動を行っていた男女２人（50 代）がトラックにはねられ死亡した。
6/2 用水路で小学生の兄弟が溺れる
（TNC テレビ西日本　2020 年 6 月 11 日 20 時 15 分）
福岡県大木町の用水路で小学５年生と２年生の兄弟が溺れて亡くなった。
6/15 伐採作業中の男性、倒木下敷きで死亡
（京都新聞　2020 年 6 月 15 日 11 時 38 分）
滋賀県近江八幡市の神社で伐採作業をしていた男性が倒木の下敷きになって亡くなった。

*　*　*　*　*

一つ目の「グロリオサ」とは、イヌサフラン科の鑑賞用の植物で熱帯っぽい見事な花を咲かせます。球根が山芋に似ていますがアルカロイド系の毒を含んでおり、今回だけでなく 2006 年、2007 年にも同様の事故が発生しています。報道では近くで山芋も栽培していたとのこと。庭周りでの誤食事故ではエンジェルズトランペット（別名：ダチュラ）でも食中毒事例が報告されています。当然かもしれませんが「食べるものの近くに有毒のものを植えない」のは大事だと思います。

二つ目の米ボーイスカウト連盟の破産。事故ではありませんが、明らかに今後のリスクマネジメント項目の一つです。キャンプ活動のリーダーやボランティアスタッフが、参加した児童・生徒に性的虐待を行なった等の事例。過去数十年にさかのぼって多数の被害者から賠償訴訟が行われた結果の破産申請です。日本でも今年、20 代男性が複数の団体でボランティアスタッフを行いながら小学生男子に性的暴行を行なった事件が報道されました。「同性であっても密室に二人きりにならない」「身体的な接触は基本、避ける」などを守る（&守らせる）必要があります。

三つ目の国道での清掃活動は 50 代男性の無免許運転によるひき逃げでした。ボランティアで道路沿いの落ち葉などを片付けていたところ、「ものすごいスピードで来た」とのこと。現場の見通しや交通量、どのような安全対策をしていたか？などについては報道にありません。道路沿いの活動は危険なものと考えて、のぼりや看板、誘導員などでドライバーの注意喚起をし、参加者や作業者の身を守ることが不可欠です。

四つ目の大木町の用水路の事故。たいへん傷ましい事故です。もともと大木町は筑後川の下流に位置し、隣接する柳川市や大川市とともにかつて有明海の干潟だった土地です。クリークを掘りながら陸地を作っていった歴史があり、町中を縦横に水が流れているのは町の特徴でもあります。どうしたらこのような事故が防げるか？暗渠化や転落防止柵か？子どもたちへの教育か？大人の見守りか？と考えさせられる事故でした。

最後の伐採作業の事故。報道写真では、枯れたアカマツのようでした。松枯れ対策の一環だったのではないかと思います。このような事故が起きないよう、適切な作業技術や安全管理知識が普及するよう願っています。

総会のご報告

●第１２回総会のご報告

去る令和２年５月２８日、特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワークの第 12 回目となる通常総会が行われました。

以下の通り、その議事をご報告いたします。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

１．開催日時　令和２年５月２８日
　１７：００～１８：１０

２．開催場所　九州大学大橋キャンパス２号館４階朝廣教官室（福岡市南区塩原４－９－１）およびオンライン会議ツール zoom を利用した遠隔参加

３．正会員総数１１名　出席した正会員数
　７名（本人出席６名、表決委任者１名）

４．審議事項
　第１号議案　令和元年度事業報告及び収支決算について
　第２号議案　令和２年度事業計画及び収支予算について
　第３号議案　役員改選について
　第４号議案　その他

５．議長選任の経過

定刻になり理事長 朝廣和夫より開会が宣言された。引き続き、新型コロナウイルスによる影響下での出席及び日頃の活動への謝辞と、各議案への検討をお願いする旨の挨拶があった。

また、定款２７条により、本日の出席者６名、委任状による出席者１名、計７名は当団体正会員数１１名の５分の１を超えており、本総会は成立しているとの報告があった。

続いて、定款第２６条に従い、理事 志賀壮史が議長に満場一致で選任され、下記議案につき審議した。

６．議事の経過の要領及び議案別決議の結果

第１号議案について

資料をもとに令和元年度の事業報告及び決算報告がなされた。その中で、収支決算における未収会費の計上及び振込手数料の仕分けについての意見が出され、該当箇所を修正することとなった。続いて、監事 原愛子による監査の結果、事業及び会計が適正に行われている旨の報告が書面により行われた。

以上の内容を受けて第１号議案について一部修正を行った上で採決を行ったところ、全員一致で承認された。

第２号議案について

資料をもとに令和２年度事業計画及び予算計画の説明がなされた。事業費について、講師謝金を計上すべきとの意見が出され、講師謝金 0 円を 60,000 円とすることとなった。これに応じて収入のボランティア受入評価益を 250,000 円から 190,000 円に、事業費のボランティア評価費用を 100,000 円から 40,000 円とすることとした。

以上の内容を受けて第２号議案について一部修正の上で採決を行ったところ、全員一致で承認された。

第３号議案について

議長から、現役員については令和２年６月３０日をもって任期満了の旨、説明があった。意見を求めたところ現役員の再任としたい旨の意見があった。

以上の内容を受けて第３号議案について採決を行ったところ、全員一致で承認された。

第４号議案について

議長からその他の意見を求めたところ、正会員、特に団体正会員の入会を募っていくべきとの意見や、リーダー講座の今後の進め方について方針や PR の方法を検討していきたいとの意見が出され、今後検討していくこととなった。

７．議事録署名人の選任に関する事項

議長より、議事録署名人２名の選出について諮ったところ、小森耕太氏と平由以子氏の両名が推薦・承認された。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●「まちなか里山事業」８月より再開

自粛期間でお休みしていた「まちなか里山事業（NPO法人グリーンシティ福岡＋福岡市植物園・みどり運営課）」が８月下旬より再開します。その活動の一つが福岡市のまんなか、南公園で行なう「植物園里山ボランティア」。はじめての方も大歓迎！森の手入れを体験してみたい方はぜひどうぞ。詳しくはQRコードからFacebookページをご覧いただくか、電話092-215-3913まで。

●『災害後の農地復旧のための共助支援の手引き』の入手方法

手引きのデータ版は、下記のQRコードよりダウンロードできます。本編、事例編はPDFファイルです。様式編は、ワード、エクセル形式で、ダウンロードし事由に書き換えて利用してください。なお、2016年版も併せてダウンロードできますのでご利用ください。

また、災害対応などで冊子版をご入用の方は、下記、朝廣まで、ご氏名、住所、必要部数をご連絡ください。

asahiro@design.kyushu-u.ac.jp

●放送大学での放映

放送大学では「コミュニティがつなぐ安全・安心」の放送が行われます。この講義群は、国立研究開発法人防災科学技術研究所の林春男理事長が総括されています。第 12 回では農業ボランティアについて紹介がなされ、平成 24 年 7 月九州北部豪雨における福岡県八女市、うきは市の被害の事例を基に、JCVN 理事長の朝廣、また、副理事長の小森氏、他が出演しています。お時間のある方は、ぜひ、ご覧ください。

「コミュニティがつなぐ安全・安心」第12回
第１学期（４月１日～７月１４日）
BS２３２チャンネル　6 月 19 日（金）21 時 00 分～21 時 45 分
夏期学習期間(９月)
BS２３１チャンネル　9 月 24 日（木）09 時 45 分～10 時 30 分
以降、2024 年 3 月まで繰り返し放送されます。

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

・個人正会員（¥10,000／年）
・個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
・団体正会員（¥20,000／年）
・団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

［会費・寄付振込口座］

番号：０１７６０－９－１２２４０７

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS　２２
■発行日：２０２０年７月２９日
■発行頻度：年3回
■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）
■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org